St. Luke's International University Repository

養護教諭の立場から学校を俯瞰する: 友人関係研究からの期待

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-05-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 歌川, 光一, Utagawa, Koichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016418

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

聖路加国際大学教育実践論集 Vol.1　pp.54-60

［報告］

養護教諭の立場から学校を俯瞰する―友人関係研究からの期待―

歌川光一（聖路加国際大学）

１．はじめに

養護教諭の健康相談活動の主要な位置を占める問題として、児童・生徒間の友人関係がある（五十嵐・廣原 2015）。2000 年代以降の教育社会学研究では、「いじめ」の温床ともなる友人関係の緊張についての指摘がある（土井 2008、鈴木 2012、知念渉 2017 など）。

子どもの貧困や児童虐待などの家庭環境に関わる問題が増える昨今、また、COVID-19 感染拡大を経験している現在、心の健康の問題に関わる友人関係についての考察は、健康相談活動の中でも一見優先度が低いように見えるかもしれない。しかし児童・生徒の目線に立って学校の存在を捉えるのであれば、「勉強（学習）」と同程度かそれ以上に「友達」の存在は大きいものである。

「友達、友情とは何か」という問い自体は珍しくなく、既に読みやすい新書なども世に出ている（菅野 2008、石田 2021 など）。しかし、学校教育が「友達」「友情」等の意義について、そもそもどのような顕在的カリキュラムを整えているのかについては、思いのほか研究蓄積が十分ではない。その背景として、友人関係は学校教育においても基本的には児童・生徒のプライベートな領域と見なされ、いざこざ、喧嘩、いじめのような関係の綻びが見られるときのみ教員が介入する問題として扱われやすいことが挙げられる。友人関係に関する教育社会学研究についても、グループ化が本格化する中学生以上の生徒文化研究が主流であったように思われる。

筆者はここ数年、教職課程担当教員として、保育、生活科、小・中学校の道徳科、特別活動等を中心に、その教育課程、教科書・教材、また教職課程の教育実践として教職志望学生についてどのよう

に指導するか検討してきた[1)]。本報告では、それらから得られた研究課題の紹介を交え、養護教諭に期待する役割について展望を述べたい。

２．友人関係研究の観点から

（１）保育と友人関係および小学校への接続

2017 年要領改訂に際して幼保小連携を視野に入れて提示された「幼児の終わりまでに育って欲しい姿」として、「友達」は複数回に渡って言及されており、他者や集団との関わりの中での自我の発達や、遊び・学習の遂行や深化に不可欠なものとして想定されている。一方で、2017 年改訂要領の解説では、友達をつくる主体的なプロセスは明示されていないという課題がある（水引・歌川 2017、歌川 2018a）。他方で、幼児が触れる絵本（磯辺 2016）や歌（濱野 2021）によって、多様な「ともだち」観が伝達されている現状にある。

スタートカリキュラムとして位置づく小学校の生活科では、小単元「がっこうたんけん」の前に、友達との関係作りを行うことになっている。ここでは、教科書中の遊びの様子からの気づきを話し合う、実際に馴染みのある遊びを実践した上で名刺交換などの自己紹介や良好な関係を維持するための挨拶や言葉がけを学ぶ、という流れになっている。道徳科や特別活動において、「友人関係≒級友間の問題」という想定を強く働かせる傾向がある一方で、生活科の導入においては、「学校生活を円滑に送るための友達作り」という視点が明確であり、この点は、他校種の教育課程には見られない特徴である（水引・歌川・濱野 2018）。

なお、小学校入学は子どもにとって校種が変わる初めての経験であり、「入学する小学校に同じ幼稚園、保育所の友達や知り合いがどの程度いるのか」は、保護者にとっても重大な関心事の一つである。しかし、「進学後に友人やその関係が変わる」ことは、暗黙のうちに

やる過ごされる問題になっているためか、研究蓄も十分ではない。

（２）小・中学校の「特別の教科　道徳」と友人関係

小・中学校の「特別の教科　道徳」は、「友情、信頼」の単元において、友情や友人関係の重要性を直接的に伝達する役割を果たしている（歌川・岡邑 2017、歌川・濱野 2019）。道徳教科書において友達との関係づくりは、1 で述べたような社会状況を反映してか、友達の作り方や増やし方、関係維持、いじめへの対応等のさまざまな点においてコツやポイントが紹介され、児童・生徒が実践しやすいものとなっている。また、単に友人環境に適応するだけではなく、場合によっては距離を置く途も示されている。その反面、友人関係上のトラブルは自己のタイプや感情のコントロール、捉え方の転換によって解決されるという側面が強調されており、集団や学級内での友人関係を俯瞰するような視点にやや欠けている（歌川 2018b）。また、（４）に示すようなジェンダー・バイアスの問題もある。

（３）教科外活動、生徒指導と友人関係

教科外活動や生徒指導と友人関係については、検討すべき範囲が広く、筆者自身も部分的な論究（歌川 2015、歌川・鈴木・岡邑・佐々木 2018）に留まっている。このうち養護教諭に直接的関りが深いのは、同行が求められる遠足、修学旅行等の「学校行事」だろう（歌川 2015）。学校行事は、児童・生徒の友人関係が顕在化しやすく、それらが教育目標の達成にも影響を与えることが知られている（鈴木 2018）。

なお、部活動に関しては、所属する部活動が友人数等に影響していることが明らかとなっている（鈴木・歌川・金澤 2016）。日本の中学校・高等学校では多くの場合、「部活動」といえば、既存の部・会から選択するシステムとなっており、どこに所属するかは、その

内容に対する興味・関心に加え、学級、学校、社会で「どのように見られたいか」にも影響されていることにも注意が必要である。

（４）学校における友人関係とジェンダー

（２）で言及した道徳教科書の研究において、中学校について、男子間の友情は、部活動での「ライバル」関係のように、自律した者同士が力や強さから出発、成功をめざす友情であるのに対し、女子間の友情は、SNS でのトラブルなど、ケアを必要とする者、依存する人間同士の友情が描かれており、その友情の葛藤が昇華されて何かの成功につながるようには描かれていない。また、「友情」のイメージや友人関係の持ち方、特定の友人と友情を深める際の周辺的な友人との関わり方等の点でジェンダー・バイアスも見られる（歌川 2019)。共通の成功を目指す男子間の友情は目的志向的で、学校教育上取り扱いやすいかもしれないが、共有する関心対象が失われるとそのつながりが切れやすく、孤立に陥りやすいという側面も指摘されている。道徳科を含む学校教育の指導上において、ケアの側面の評価をいかに議論の俎上に載せていくかは論点の一つである。

教職課程の授業においてこれらを観察する手段の一つとして、さくらももこ氏の「大野君と杉山君」の視聴などは有効だと思われる（水引・歌川 2019）が、このことが、寺町（2020）が指摘するような教員が児童・生徒の関係をまなざす際のジェンダー・バイアスにつながらないように配慮することも必要である。

３．おわりに

養護教諭は、学級や学年に限らず児童・生徒の健康状態を把握している点に特徴があるが、友人関係についてこの立場に立つことの意義は大きいものと思われる。というのも、多くの児童・生徒にとって、「学校生活における友人関係の問題≒学級内における友人関係

の問題」であり、養護教諭はそれらを俯瞰できるためである。また、学校において「友達」「友情」に関する顕在的カリキュラムが曖昧になる理由の一つに、「学級内で仲よく過ごしてほしい」「学級内で『本当の友達』を見つけて欲しい」という学校、学級運営側の願望が混ぜ込まれていることが影響していることは否めないだろう。この意味において、担任教員の動きも合わせて児童・生徒の友人関係を俯瞰できるのが養護教諭であり、現に、児童・生徒もそれを察し、養護教諭を信頼して保健室を訪れるのだろう。今後、友人関係をめぐる領域・教科、教科外活動等の顕在的カリキュラムを踏まえた養護教諭の役割やその変遷に関する研究の深化が期待される。

【注】

1）NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル採択課題として『中学生日記』における友情やいじめのイメージについて検討中である（2019 年度第 4 回「1970～80 年代『中学生日記』における友情の表象」、2020 年度第 3 回「1980～90 年代の中学生におけるいじめ問題の生成過程」）。この検討結果に関しては稿を改めたい。

【付記】

本稿は、科研費・基盤研究（C）「社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究」（18K025485、研究代表者・中村豊）の研究成果の一部である。

【引用・参考文献】

知念渉（2017）「〈インキャラ〉とは何か―男性性をめぐるダイナミクス」『教育社会学研究』100、pp. 325-345.

土井隆義（2008）『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。

濱野義貴（2021）「子どもの歌の歌詞にみるともだち観―幼稚園教育要領の領域「人間関係」成立以後に着目して―」明星大学通信制大学院教育学研究科修士論文。

五十嵐茉莉・廣原紀恵(2015)「中・高校生の友人グループに対する価値観について―養護教諭の健康相談活動の一助として―」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』65、pp. 323－334.

石田光規（2021）『友人の社会史』晃洋書房。

磯辺菜々（2016）「絵本に描かれる『友情』イメージと友情至上主義の社会学的分析『教育・社会・文化』17、pp. 15-35.

菅野仁（2008）『友だち幻想―人と人の〈つながり〉を考える―』ちくまプリマー新書。

水引貴子・歌川光一（2017）「「友達」をめぐる保育内容(人間関係)と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題―2017 年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に―」『敬心・研究ジャーナル』1（2)、pp. 131-137.

――――・――――（2019）「「大野君と杉山君」をもう一度―さくらももこ氏の追悼に寄せて―」『敬心・研究ジャーナル』3 (1)、pp. 63-65.

水引貴子・歌川光一・濱野義貴（2018）「友達との関係づくりをめぐる小学校第一学年の顕在的カリキュラムの検討―生活科教科書と道徳の読み物教材の比較から―」『敬心・研究ジャーナル』2（1)、pp. 129-134.

鈴木翔（2012）『教室内（スクール）カースト』光文社新書。

――――（2018）「高校生の友人関係の状況が文化祭および体育祭への消極的な参加態度に与える影響―都立高校生を対象とした質問紙調査データの分析から」『日本高校教育学会年報』(25)、pp. 28-37.

鈴木翔・歌川光一・金澤貴之（2016）「中学生における所属する部活

動と他の学校生活の関連性の検討―中学 2 年生を対象とした質問紙調査の分析から―」『群馬大学教育実践研究』第 33 号、pp. 107-114.

寺町晋哉（2020）「女子のトラブルを『ドロドロしたもの』と見なす教師のジェンダー・バイアス―関係性への焦点化に着目して」『宮崎公立大学人文学部紀要』27（1）、pp. 103-120.

歌川光一（2015）「修学旅行への民泊導入論の展開―特別活動の観点からの再考―」『学習院大学教職課程年報』創刊号、pp. 5-17.

――――（2018a）「「友達」をめぐる幼保小連携に向けて―保育内容・生活科・道徳―」現代保育問題研究会編『現代保育内容研究シリーズ 3 保育をめぐる諸問題』一藝社、pp. 33-45.

――――（2018b）「小・中学校道徳教科書にみる友達との関係づくりの諸相」『現代教育研究所紀要』4、pp. 37-42.

――――（2019）「中学校道徳教科書の読み物にみる友情のジェンダー表象」『女性文化研究所紀要』46、pp. 97-105.

歌川光一・濱野義貴（2019）「中学校道徳教科書にみる「友情」―学校外での関係づくりを題材とした読み物に着目して―」『生活機構研究科紀要』28、pp. 15-21.

歌川光一・岡邑衛（2017）「小中学校における「友達」をめぐる顕在的カリキュラムの検討―道徳の読み物教材に描かれる友情―」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』3、pp. 75-84.

歌川光一・鈴木翔（2015）「学級集団の人間関係を題材とした教職志望学生に対する初年次教育の展望―『いじめ問題』を中心に―」『学習院大学文学部研究年報』61、pp. 209-234.

歌川光一・鈴木翔・岡邑衛・佐々木基裕（2018）「生徒指導上の問題としての援助交際再考」『学苑』936、pp. 53-63.